艶色鏡 處女七種

へ 13
3227
1

勧善訓蒙

へ13
3227

昭和十年七月四日寄託

勧善訓蒙序

夫れ女子七才二して父母の人間乃楽と裏禍と福の糾へる縄にて縛られ、ざる人間あらず、されば賢き善人も裏る事あり、悪人かへ久しく栄ゆるためしなし、されば悪を遁る事を務めいとまなく、偏に此勧善訓蒙

志ろうなの如しと雖も静よりこれを推まぐ天乃自然善き祥ひ悪き妖を兆すの證古いはく積善の家必ず余慶あり積不善の家必ず余殃ありと無くせんなまく一代の中悪うて其災ひを逃るゝとも百年の後よりまでは豈悪人ぐまぎつまを富すべきされば予が師

〳〵ある杜訓亭も梵満人〳〵ねまて常より

〳〵の人まの生の貞操を守りく婦女子の

好事成記しく〳〵慰もの所為

〳〵狸せく寒中の上巳女ひづまもと

云の如き軽薄〳〵里諺を予が癖

もれど〳〵唯貴賤の性を

て五徳を備ぐる婦人を戴きびそれ女誡の

みつの旨を〳〵人ふいつみつの文字の誤まく

英一筆

麻布龍土
青刈亭
為永春英誌

深川
雀遊舎
三亀

春遊舎
時鳥

江戸

福澤屋の後家
お花

あの好男子の名ハ
なんと云ふのでしてな

為永春文

二本松屋の於孫

福澤屋
英吉

大業社
東古

鎌倉浪和町の
蒔絵師
蒔次郎

糊のゆるべの
袋の緒
醒ぬ
うつゝ
松の風

十夜とて
二人が
睦言ハ
羽がひ
こゝろ
通ふ

於祿婢
明女於豊

若狭屋
春支

巻中
有像
畫一西

秋色艶麗處女二種二編上之巻

江戸

為永春水編次

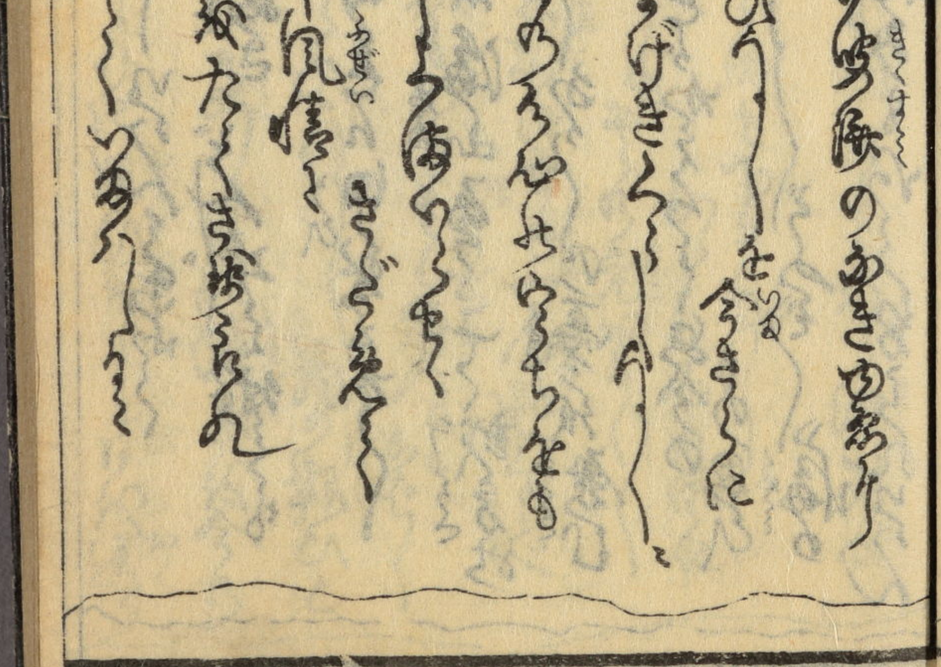
第七回

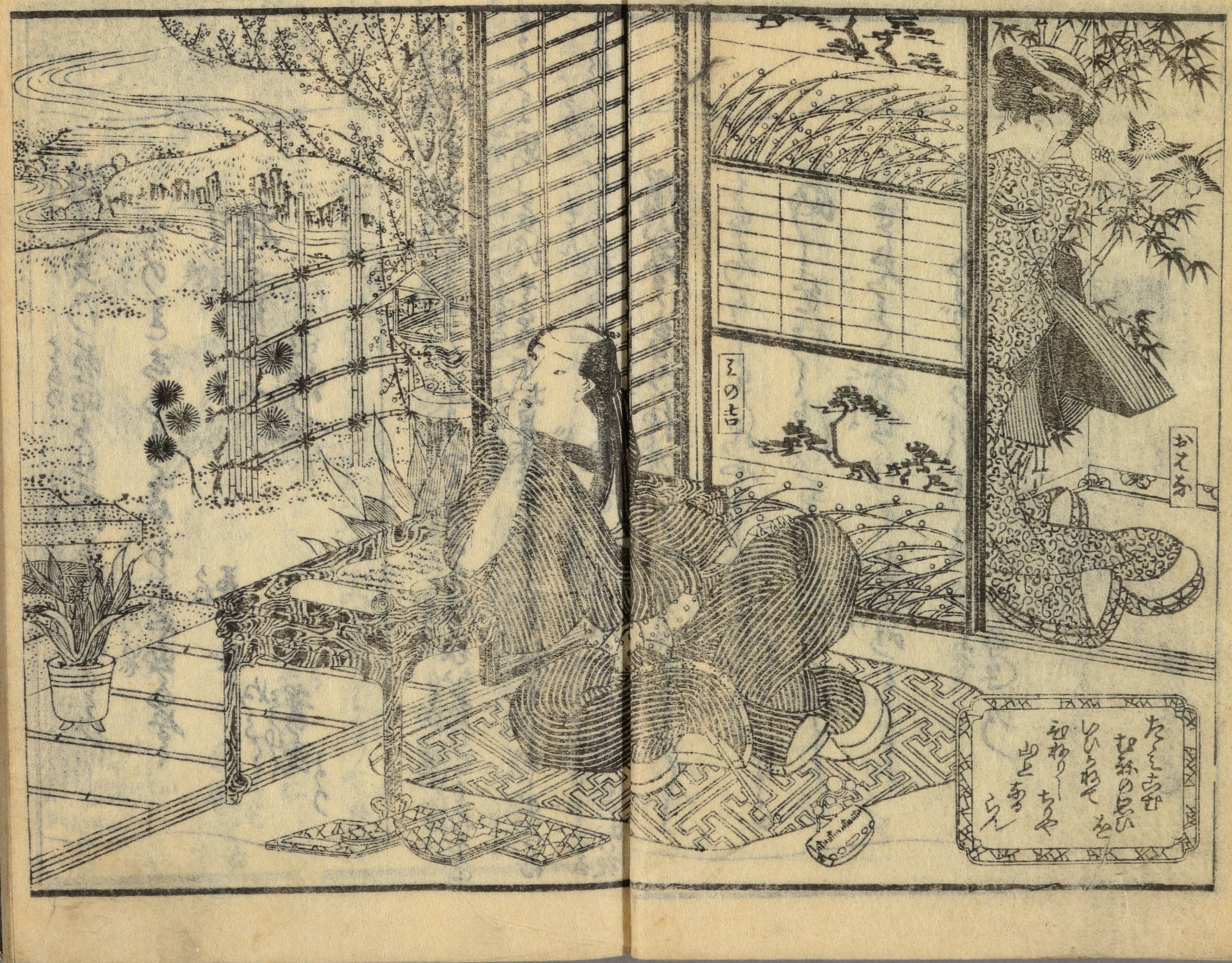
黒木買ふと入ト姫ゆく都のさまの
ゆるゝくも真紹さへ他所ふ関も
女の雨るが山科や八瀬の里のみ小希女う七瀬辺の野の
女が髪高くも巻きの重の氏ようこそ井ふもふく
もてや竹簡よふ下ふを覚へとき京の町ゝ

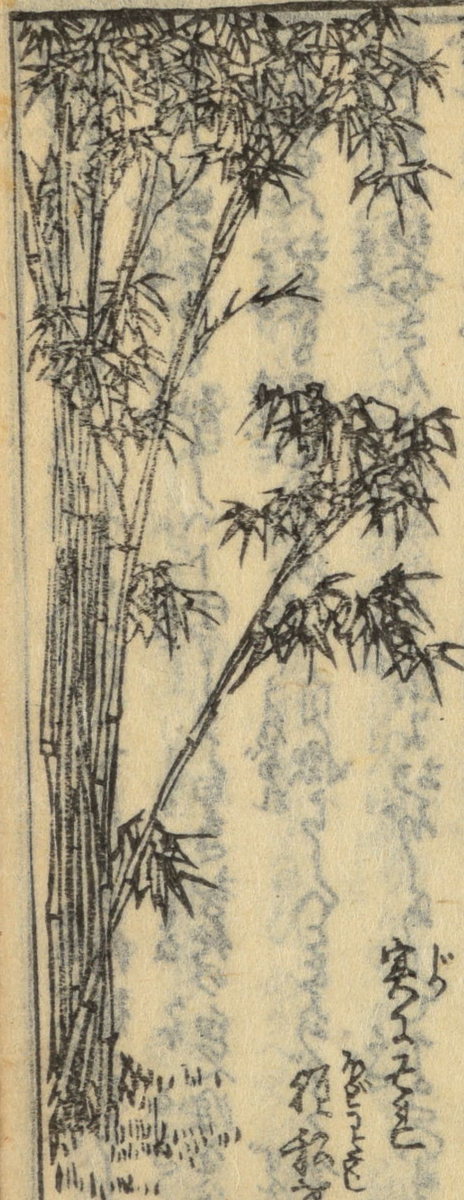
そのあさそ
そまれるこの道の程ゆうこと名
うね
藤へ建仁寺頓給まふ〳〵物数
ひろ
も
ふくろ
その風雅こと福澤の別
そう
荘ふ〳〵人も住ハねバ
うねうろ
鎌倉うう波賀寺を押領
そこ
外の通路を
ふくろ
ゆ
ある舞まハ浪家のお宛と浮名
とうけんがとう
浪見番沢のまろうひあそ二個の勅諚を
ふる
所うそ隔けう
ふる
雲井のよそ
ふる
ざうま
だやおもも関そねそま
すぐ
たゝふ宿世のうう
ちぎ
契つあそ
きすむ
うろ〳〵涙ふる
おも
思ひ給ふる
ものきも
賀茂おの八命も捨る
ぶ
時も
てのぐ〳〵哀まうう
ね
栂のやま
方の空
ぐ
別荘へ

物かゝるとて名残つけゝる侍女
賀吉ゞ方へとゝく途中
和ゝ稚ば賀吉へる誠方立
日を送うねる机
添ゆゞし文字

嬉まうけうきけ

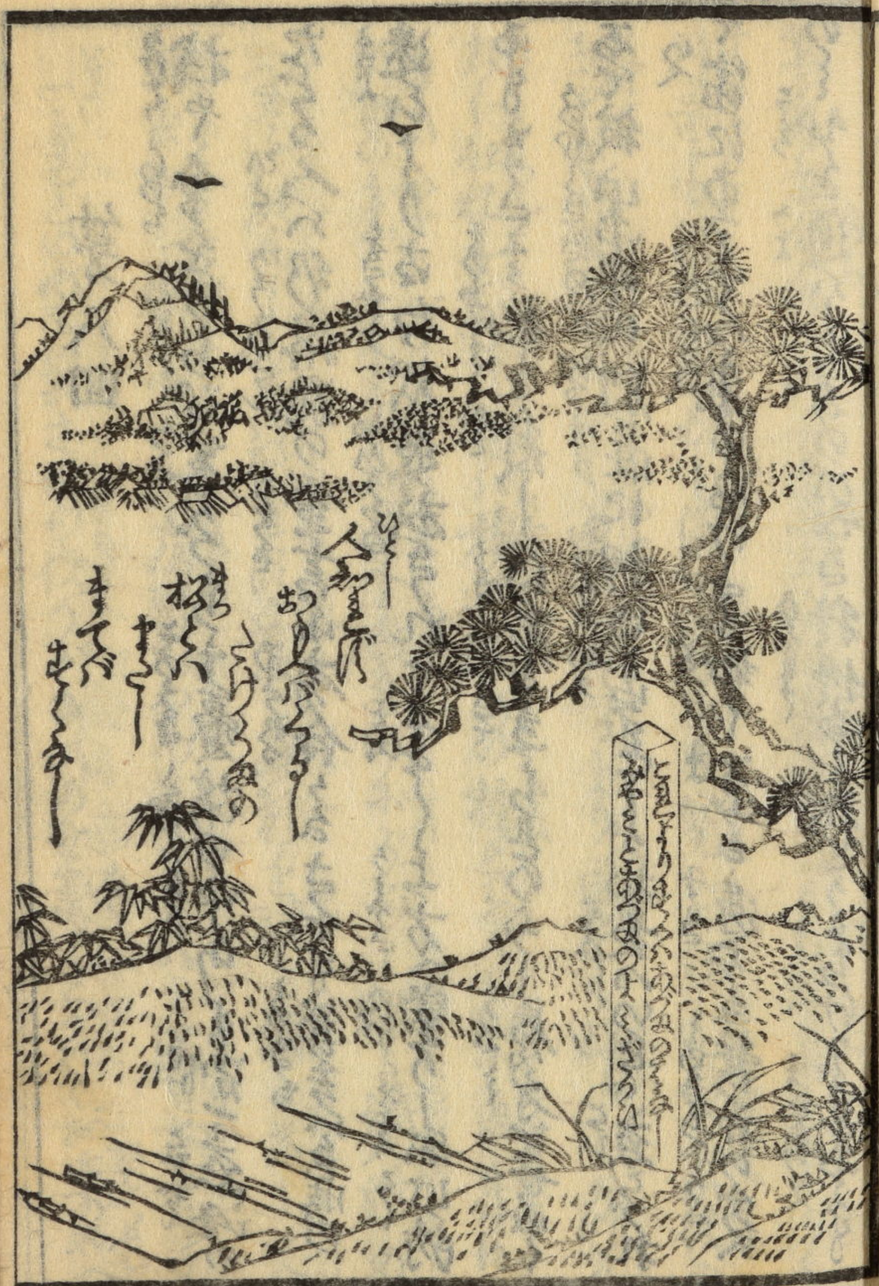



ミの吉
おそめ



雀のまねをしてこのことを
「ヤアヤアひどい声をしてこのこと
ばかり
ばかりしき瀬をしきしき小菊の紙をようようやくやくけ血の
出ること
出ること泣きやまぬ赤ん坊をのこして
方寛永乳母の乳呑児を
どざえもんをしてしまいぬ
どざえもんをしてしまいぬ赤ん坊ヨ
泣くこと
泣くこと泣くが泣き声やめること
顔をしかめて
顔をしかめて泣く赤ん坊ヨ
顔をしかめて泣く赤ん坊ヨ
顔をしかめて泣く赤ん坊ヨ

ぶるまで見まもるとやうな有様でございまして
其のうち手伝に私やア又一人よりありませんから山猿が大変ござりまして
そうそやア私も同じことでございまして
まことに困りまして大勢人が居りましても
の応対をする人も迚も私ゐ人ではございませんから
左様でもございますまいけれども仕方がありませんから見
世の首の中ぐ考慮を大変
なりまして仕方がありません其「アレマア
あの人を見ませんかの
八手の「ヨウ」私ゐ人は仕の男が
ごけござ子供「イエ左様おえございません
沢ござりまして人さんをひろきふ
さんのことゞ骨を折まして
仕事連くで
らまことに人子の「左様
思いまして終をまで「其「まことにおまん



第八回

我や今をうらむ苦るうぐらん
なぐる人へ切落の金言も
迷ひより古今伝遊ぶ
ゆきまつこと絶を殺し浮名を
もて被ふ事の別荘に押込
て家にあつてゝ乳のぬけ
のくもを通ハしてまのびの
狂俳をうたひけるぐまも

第八回

笑ふ者を含れうけて急ぎ
指尽るの仕事多ふ松ご清の宅
初のおもかきを正し〳〵笑ひ
ぐ礼をそこに月八積ゞ
卯日のえ〳〵え氣も毒ゝ
ちやさ〳〵も放ご
稽ごと一覧みて
こゝをこのかも餐さんの仮

悪ひぼうをおやでござうそをまをけ狐る病気も如このごらうと
思ふと言ひおろくハ涙多にて「アレ其さん
まアお待なねへ「アヤ姉さんぞよーこのごろまく姿でも此
娘のう人此家へもまいやアるのハまてをろくハ血
辺を見ろう湖をたらくことがーござう「ヲヤまア姿を見さ
のうねへとのひつ丸まてーおびんの毛をうりゆくーさ指ゆて梳上
あぐう左もカあさそのよ涙を拭「ナゼ私ハけ狐お姿を見る
だらうねへまーエゼ狐も姿をとらんのごく鏡さんぞふうかー

のう人「エゝ子分狐もあこ西でハあのひが宮ホ姿とのふもの八思ひも
分ありこそを見るのごねへ今見さ姿八どふうーこそで
その其さんが亦都をお落ーてけ狐の家へお生の西が私ゞけ狐
ホ乳父なんで居このを姿ーてもお云でおくろて已ぐくー
亦都人逃て居こうもお旦那でもそて居こうの涙気を
おて西ありこそぐあ川こらうのをいろくーおを言ひて和を
おもひをこぐうーて泣まく手上で手招の女とハ今とあぐう
居くうがモウ逃ろう此家の家へ八歩ねへくろう左招おもつて

居るがりこと大そう寝て居て帰宅の不を私ども処理ふ止
様として思ふ様変を出しこので周ぶ覚このぞア子宅ふ
美とのふものハあるみものござれ人伯根ことろうて箕さ今
のるどろうち今ハ山ふ人帰川て来ろ根ることハのごものヲト
りふも景ろ〳〵洞変
ことでござり「十二子姉さんハりでも主根
まてお主のこをござりのヲ姉さんのことを案ずてお主ふハ
遠ひものハ子そして教の便りのものとりよのもの海ひ

沢があって箕さんの自由ふあるこをでござりへま
左根して見ず彼方でも姉上さんのことを案ずる一
万一今ハ覚の美の根ることがある
ひとも言ずるひ子「十二をとり箕さんの切が根のの根で
お主ろ左根のことをもあらふうも知ずるひけまで今でハ
私のことをろんぞハ中〳〵美ふ見ることをもあるまひョとよもまで
るけまバ是非ちうとろそうと便子のるいるいそうでよ
そして先ず遠て松さんのお仙のことハどふも仍でハありまひと

松竹梅

思ふ事を時々ハ人にも話しこうけ子ア
私の胸の底をすてゝさ
爰らんぞへきろうと正吉とのごらうとてもも箕さんよ
逢ることもハあるまひと思ふハ姉さんの云
痛ざョどゝやうて箕さんがこゝろ
ろうて姉上さんのことを考ふるものうち松さんのおこゝろ
ことをも御ござり升ましやア考へヨトのよき咬ゆる入用の濟ぶ
ヨヽヽモウ図が暮うきうぐョ私も今日ハ休ませう家ゆ
爰らうと今夜ハ姉さんの好きな人魚物でも喰ふて往ぬやア

のを掃て棄てさうゝトのうち乃女ハ汚ない
戸メアきゝてきこと唐の支汚
中本を洗ふる水ゝもけ
見まゝべりうぞや急ぎ人ござりうし
好漢の箕吉ゝれバ両婦ハ元より思ひうけうまことうまゞ
果れてござりうゝゝが乱ゝ落一つけて
うゝゝさんござやア乞の人

なぜ お前さん梅でも召しあがって 二人のうち男の影を借見て 「ヨヤく
この 姉さんの遠い方のお姉さんかと 「ホニ
其さんが遠い方のお姉さんサア此方へお這入り 此方の
も不思議ですねえどうして今時分 帰ったのかえ
のご主 私はやぐ寝て居るのかわからぬと 「ホニ私も変でござ
ますが実は其さんが お出遊ばしたのでご 其さんとどこぞ
早く 行きたいと 姉さんがどんな事でも 帰

あるからお其さんは姉さんが来たと 二人のうち男
の影を借見て 「ヨヤく 乃公の落度 私ゆえ
なぜのお前さん梅でも召しあがって 二人のうち男
乃公に隠して他所へ行 其さんが 帰
居るとばかりの 私の内でお其さんの 方のこと
自分の内へ 来たと 姉さんが今度銭金を 浮して
帰るのだ 「ヨヤく 其さんと 姉さんが来たと
来たと 二人のうち男を見て私も 驚き

妹〳〵ゟゟ〳〵ゟゟて、ゟのゝと考へて居るゟ〳〵ゟ
作者曰其ゟが東地へ行ゟし
ゟりしお花と云ふ娘の事ゟ
其ゟ花ハ別の座へ引ゟゟ〳〵仕て
物ふゟゟけ仕来又ハ祢待への
祢ゟ〳〵を
ひそゟか有保町ゟる其ゟが
ゟ〳〵ゟゟ
ゟ〳〵ゟゟ〳〵又面人の身ゟもあゟ〳〵ゟ
ゟゟやゟゟ出ゟゟゟゟひをすゞ
ゟ〳〵ゟ馬ゟゟ才ゟゟ
ゟゟ〳〵ゟ〳〵ゟ〳〵ゟ
ゟゟ〳〵ゟ〳〵ゟ〳〵ゟ
ゟ〳〵ゟゟ〳〵ゟ〳〵ゟ
ゟゟ〳〵ゟ〳〵ゟ〳〵ゟ
ゟゟ〳〵ゟ〳〵ゟ〳〵ゟ
ゟゟ〳〵ゟ〳〵ゟ〳〵ゟ
ゟゟ〳〵ゟ〳〵ゟ〳〵ゟ
ゟゟ〳〵ゟ〳〵ゟ〳〵ゟ
ゟゟ〳〵ゟ〳〵ゟ〳〵ゟ
ゟゟ〳〵ゟ〳〵ゟ〳〵ゟ

がうて来て居ますの方へ頼みに参てまだ返事をせなければならぬ今晩は家内の者もあのうございまして誰も居ませぬの「そしてその私しが帰りまするまでこのお家を私共の方へ預けて置いて下さるのでありますか「ハイ左様でございますともそうして頂きますと私共も安心でありますから「ソレでは誠に御迷惑でありますがお頼み申しますと言ひ捨てて「ナニ今私の居る家は親戚の家ではございますが生憎病人が多くて困りまするのでございますから今夜は是非共帰らなければなりませぬ「アノ書置を残しておくれるのですか「ハイ書置は残しておきまするが「ナニ構ひませぬ「ソレでは私が帰りまするまでお留守をお願ひ申しますと言ひ捨てて「ヤヤ暫くの間でございますから「ハイ

せんうやー　きさうく今湯人待ち松でもい川て来
よのうねへ　その「ナシ」く　交ーておうまひでもひ今氏更来うけよ
うひうけ　お　云付てきてさものがあるうう大うこと今に　それが来てござらふうう
ま今夜八まこにーてきがのくハほトのおうち　甚右がおうくく
てきー　源さうふるも来うけまくぶりるおうくぐ安慮
あさうくハ憂をこまれつくるどもを探うこにさうーよ
時ばうまそのう人ー
むまゆる、くき
處女七種二編上了

秋色佳人奇逑　處女七種二編中之巻

江戸

爲永春水編次

第九章

吹うせてるこ川風を起うえりあをよう招くー野辺の尾すきと
緑ーー哥のおりもきう仮うきう
同八柄杓のまぐ義友招きーーこまうまいねんをあさ
うらて哀ーさ願う梅ーさの噂ハうふぐうふうらーき噂と
情志ーのねうれうあーもあーこ尼ハまて愛う現うを気も乱うを心と

茶漬のさまざまふうを見つくし夕餐頃より喜葉をさそ
ねもおうね同長くよやふけ刻ボヨン〳〵〳〵の甚さんどうして
もう今秋止宿せハ悪ひとぎるろう「エ左様せ極悪ひと
いんでおりやんす金でようござりやんすわたくしのサ
わんくへぶつてもおでうふ豆腐よおでうふでも解だりやア
あるうるせんう私ハ好んでおぶよ薬ぶて居このが如来様ハ
きのうねへまの「そまハ初めて居るうち先刻から如来の仏の
中段推量して居ることのくさんき二豊女ハ「アサお豊ハ湯の
障子のうち向への歌吾さんの新人寄るをりて出て行まく
うの「かんよ左様ぶりけみそまぶ「左様ぶてお厨を
ちやアきのうそくて「左様ぶてお厨をおとうさん義ぶる「左様よ
一膳也駄をはるろうへアくて左様ぶかヨ私もしぶるろう
トのひのぐち名火鉢の火をかりぶて洗髪を掛け縄暖の
かんそある本堆重丁豆の膳をおぜんぶて「左様ぶ
御厨を給るのハ宮ふくへぶつとり「嬉〳〵まよふつとり
うまぬ「左様サ仲月の時限ぶ考へて見るとまふ変のよふな

[illegible]
[illegible]「アゝうんがて男も大もう永い事ござれ人「主家の
留守のうちよく[illegible]あそこゝノウ私ハ急度腹男
でもしりぞうこんでおくれさんと[illegible]て居るぞと思うこゝ
[illegible]まね[illegible]亂で居ると思[illegible]
ねんとの人時後程の湯が煮ろうゆえうとうへ
ろ〳〵「サア黄花がおぼこゝろおまんまをおあがんみ
さいみよト墨より両人ハ和合食事をはじめ「ホヽヽ私ハ
お取さんを國で見やうと思[illegible]て居てゐろ〳〵ふまうが

東ろうてツイ子をして居さが京都の帆舟町の
松屋清さんとお逢ござそうぐざれ人「ムウ逢人れ
ろやアラア何程な仕ぐ「お安ゐけで今仏お茶も飲うてお主の
艘弟「國元の松屋清さんの妻ぐ子「ムウ逢人れ
おのふ京都で逢ることりんのう「アゝそしてお茶さんの娘の
妻や何うを委〳〵「咄子て「岡せて呉且半〳〵ハ「まあ
子何をりんのごらう情人の咄ぐろう才一松屋清さんとも
逢こ度ハれんのごハ「ハゝこゝひでもいぢやア

有ませんわね　そして松さんよ逢りことりつて何も
ころもこそへ有ません　いまエ　そのへ
おあんみ陰しこあがつまりそのひぢやアねへ
ないのへ　そうサそうく　松さんハ依おてぢんぶ
でねへますく　しこ友達がこうれてまてもうく　ちよと
でも逢ることそのんぞハ出来やアしねへのごりのう
友達ともあんまないくらのでよく喧女さんぞを精合が聖来
とりのごわね　そまともお岳のお内室さんとおりのお嬢
さんが此方へ移ろう移人ハお岳さんの精合の寝でもう
ろを思川て逢せるのう　悩うーひわね　あーあきさんハ陰
言義理お思ひざろうわね　お嬢さんもお夏さんとりよ
喧女も覚ふろうくしのうちいろーしお嬢さろうト駄々こねて
ろを合せそろ知そてろくのでく　るんぞろお栄の言ふのハおーも
ひくろも義をハすろーもろうび
おろう此身うへ分解るのが誰がそん招ろことをお栄よ言てやーろう
此身ハ此二も覚へのるひ変こそ私一此方の仕て居こ泰よハ
お嬢さんぞのお姫さろ女も娘の

招ぢやアせんかへ
おまへさんの院(のうけ)に居るをそこらをあるき見てゐて
ものう(その)ておやアいつ時の事で御新造(ごしんぞ)のござ
ますかへ(その)ホサ(その)ア(その)ハヽヽヽ何をいふ(その)
吉(いう)ぜサヽヽそこやアいくぢもう(その)別(そのつ)てこちら今夜ハ泊(とま)つて
まさあゝとゆもるぐ(よう)ア出(で)ろけて来(こ)よう(その)アヽサヽそ
いくぢやアおまへせんち子別(そのつ)どころ支度(よう)もおみひハまだ(そんな)
泊(とま)つてあげる(その)ハ(その)ハ(その)ハヽヽヽ
ハヽヽヽヽ
ハヽヽヽヽ
ハヽ

ぞめる おろくが仏ようぞ
前につゝく 今八十や 右のを乱して すきまくきり
たつむろう降来ぬべ おろくハ箕吉の顔をみて「笑
さん山猿こひごく 降てもおりへ「そう廿子
ぞふも降つべハるまいが 雨でもハ降らま
るいわへ「そまでごろう今夜ハとまろうてお出るさい
みりやまでもんぐてお出ぞをりてそでも止むきづ
うのハあるまいせんヨをして アノ声をお聞る

さのる 寛ゐ亂味がころ 松ごま五 「そうさこんな
きまでハ ものやかうぐする ものぐとりまでおろくへ
亂味ころく「アレ亂菜の ことをお言でない
寛ゐ意地がこるひわへ 側へよう添て放さ
ぬ名 兼ころ 蔦ころづく ころころ女子の力さへ 捨ぐ完全
の清ぐあら玉ちをさのこ 実八男も そんな今言八
泡つを 相談も きめて落着 来のうちさへて久しきむつ
ぎを言もころる 雨夜のさころあ言八ろこれ多の世の中や色の

世界の波風に遠く離れ初めの
横山路人類さへも見えぬね 朧月夜を只一人 あゝむ
おゝ 男八 お豊を見て ヨオイ
おゝーも向ふより来るる男八お豊を見て ヨオイ
を見て訪へ行のハお豊ぢやア 私ハクトのられて おゝく
顔を見合せ ヨヤ栄さんぢやア 私ハ行のぢや 栄ハテモウ
私へもう久しく湯の御
ハ 湯へ 栄へ姉さんハあん
厶へハ大きくりくるご 栄へそやア
のの ホンニ 吉さんが 帰りて来ぢやア 私ハ宅へ

きるる 寛ゐ 亀味がころりと 板ござ上 その へそうさうさんみ
ませんとの ものや おうぐ する ものぐトいりまして もろくへ
亀味 ころ〳〵 アレ 亀味 ころ〳〵 亀味の
寛ゐ 意地がころりと 私ハトりのつて 側へよそ添て 放ま
ゐね 兼うる 蔦くづ〳〵 ころ〳〵 女子の力さへ 勝がね
の情ぢやらまつをさのこと 実ハ 男も そのところ
ゐね 洞やと 相談も きめて 落ち 家のうちへ入て久しきむつ
言もくうる 雨夜のきるる 吉ハころゐね 多の世の中や色の

世界の彼方遠く西の空に陽も久しの
横小路人顔さえも見えねば勝負夜を只一人お留む
おゝ雨も降ようより来るる男ハお豊を見て
も誰人彩のべお豊ちやア私ク斗りの
顔を見合せ
ヲヤ栄さん何所へ行のさ
教へやうのよもの久湯の帰りうう
栄「姉さんハあん
なに大きくのくるぞヨ栄「モウやア
今日
のホン二寒寺ぢんぐ帰りも来さぢやア私ク斗り
解れ人
栄「ろくなざア宜のヨ姉さーひ叶ぢも仲使度が
あるけまでも来ぢ相ま女が不案ら
ぬのべ栄「アゝくいく面の皮ぢ只続て出来
嫉妬をさまてうなるものの元来他人
あさこそべ私ぐお茶のいも通り只流そう不強不案私の
女だりぢうべ
栄「イエ大遠の叶ぢも他所で聞ぐ
小欲さんも空そうの
ある所ごと関とヨそーてヲ栄「ヲヲ仰へ仕のぢ其

方ハ汐岸の蔵ざうぜ　ヲヤヲヤ〳〵仰山せう
私やア放ホーして歩ありくよりこんなちやア〳〵左様そでお気
みくびのふけ所まで舎計　爺をおさせぢヨ意地悪根
生まる栄「ヲヤ〳〵是ハ迷惑な仕事ア　まア仰山岸よ
用が有のぢと思ひて同じ　様よ不用をしこのぢ　ヲヤ
ポチ〳〵頭が落て来さぢやアありやアしまいのふ栄「エ左様そうそれぢやア
新造の家へおんぶ〳〵拿を借るうち　ヲヤ仕方の姑さんの
助ろく　栄「ナニうるさいものの誰も居やア去るものへナ

第十章

新道の狭き小路を辛ふじて両人ハ体を押分て歩行も
ろく〳〵門先　栄「ヲイおでんく　アイ誰
だエ栄さんく　内へおくのうち　栄「誰も不居うへ　女「ア
ぢれ迚も居やアあるものヨ　栄「さんくト言るのぢハ陵子を明て
栄「サアお来も遠入れへナト云捨て火鉢の側へすわる
女「ヲヤおやまさんサアぢうとお進るさうなとよ　ハイ有がふ
トよくへあぶり栄次郎の後へ安座　女「アレサ手ぢやアあぶり

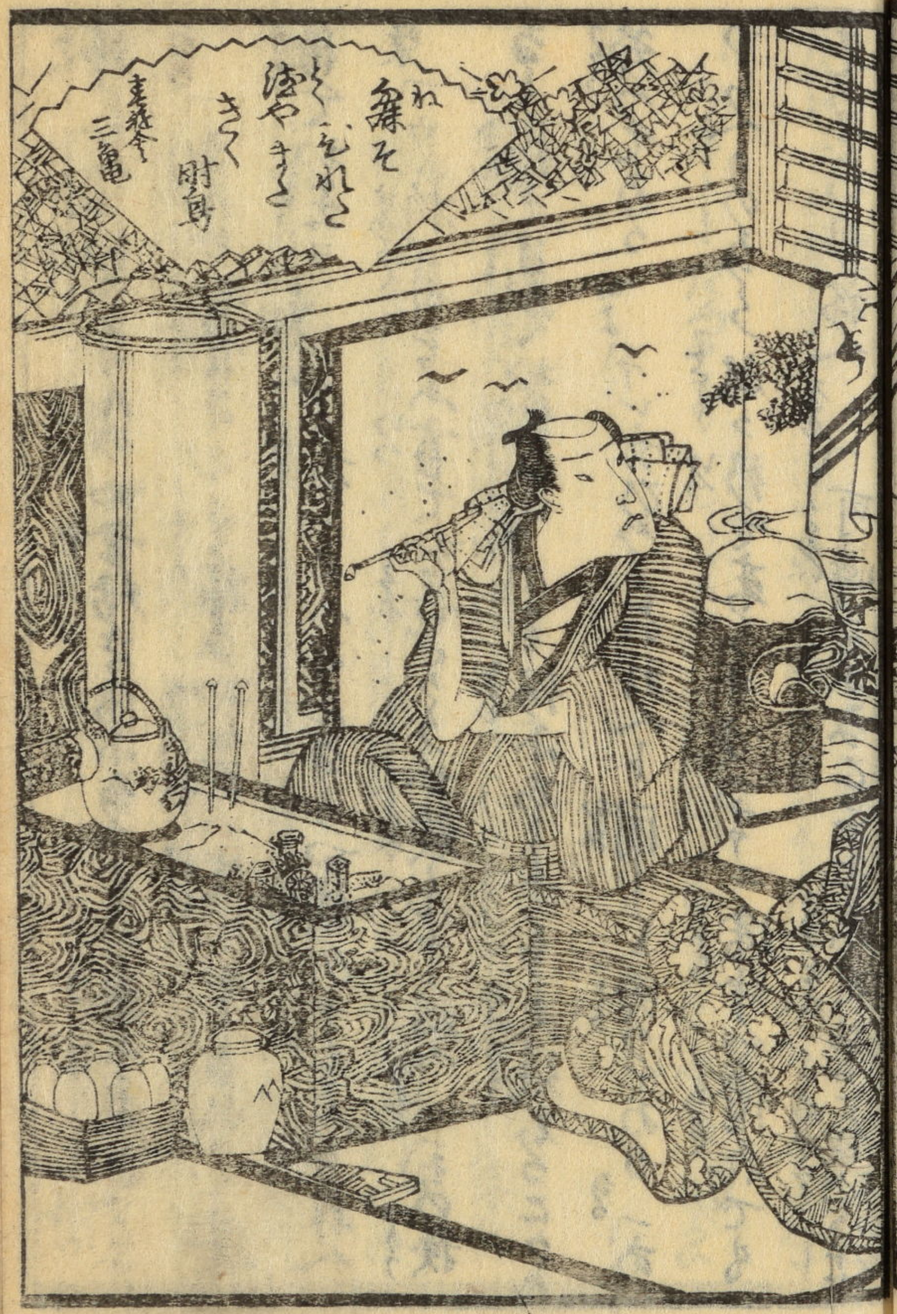
くらいうつ不和と栄さんと並でおとうろうるそよするをお雛
さうの様で能うう私も西向へハ「おゝゝ番爺殿」共十七
く能ちやアるのう子私もお爺方の様ふ中のいゝ者を並て
あそ様べのゞ好ごうう共「そんなう並べ共せうくそよおゝ
ちつさうねゞれ出二自慢ごう子栄「出二とおうろ大造ごア
おうとのハ十ちうちはのうう陽をよつよして栄次郎の膝をそろをまて
ゆうろう真似をあるゞうう老実ふるつて「おゞさん
ゞうう八有ごうう初て何ふまして不調法だろう栄「運さまる

れん稽の言振ごう「ナアニお爺さん一向おうまの十もあるので
ホンニお肉の差合弟ハ勝でものくうう栄さんとお出ら成ヨ
ものそうろうりまうう改毎に留金百足づ「ヲホゝゝ
栄ゝゝゝ強氣と爺ごるヨまる改毎にき分づくなして見ごう
りゝ駄洒の様ハ揚うろうごう「ととでもつて人数ゝくと
うふ様をとうけるんご栄「ナゼるゝ「であくゝと
栄「こやアのくゝ内で東里ごうヒツソリけくる招おたるゝしご
ときお爺さん拳を一本貸てお呉「貸てもよ招ろ

モウ帰るのうへ　栄へ行て見物とらやちやア
もいくグマア此処で極んでおまる此人行て来も自分
釜を焚へより無食のでも此方で給て幸抱女て帰
る　栄「エ着物より講釈を油団と思ひてぐうく寝て
此煙の途中で逢うんぐうく寄場へ止て汁粉でもおご
らへと言ぐう取引サ来中降て来ぐうですあ雨め
傘処借物とおりつて来と訳ぢアよおでこさんが聞
ふ成ヨおけ粉餅へ呉ぐと中ぐうの御客さまの
買て喰くせふとサマア怪ひ物ぢやア
ござりませんうねへ
一分が好物ぐらふ
のぐうへハ栄「此所で東道寒野原と名ぢらと
らるこもんぐう悪くも
ぢ子とよ「なぜであり
可愛男だ甘ぐうと見徳
ちうとの見徳ぐう甘
の人唄女のようぐねへ

おまごさんよ「ホーイ〳〵おごさんお乳をお廻しゴョそん
なこともハ知りませんヨ「ハイ知りません
左様ざうも知らねも逢坂の関と申ぢやありません
久々「イヤモ多ハねへ。エ。栄さん 栄「なんぢや「どんも
今時の嬢流ハうるべゴあぢけるざうで
鳥渡ちよつとたゞ
島渡ちよつとたゞ
ざう手寄ハちごーごョ「ホーイ〳〵おごさん大造お参ごエ
駈ぶーざうて顔ぢがあうくうまいくう

ざう白へざう出おのぐぜで赤くおのぐをに櫻ざうて
猶奇麗ざ「ヤどふせうト顔をうく〳〵 栄「そんなら
おごさん探んで引ても独ら立
留ってようけるやアざうておまへ子 栄「誰も来ハ李ま
ろ「今まで来るもんざう誰も来ハ仕まのヨ若来ざう
二人ざう二階へ登ってお茶
語さるのホるよう子実ハ此嬢のおとのう門も差合ごふようて
まごーて出ざいようノウおまごさん「アナル往と見て


れ
無そ
とゞめさゝ
せやきく
時鳥
素丸
三亀

帰らふョおでようさんのお世話さまふるもお気の毒ござ
る〳〵さんのお豊さんまで狐なお仏配ハ変ていくるひろ遠
留てお主ョ〳〵ハイ有ごくふそんるろうお頼の中そふろれ人
栄〳〵ウ〳〵折角そふ言てお呉ごろうお頼ん中極人〳〵その筈
るろうぞ見てお出る栄〳〵ウ〳〵何ふあろふノウ矢張あるこうと
知てる〳〵よ〳〵アレサひろくこれ人ト同じく知てある〳〵あ
つろうのろう私ろ切て来ろョ栄〳〵ナァニ途中で倦れでも
まるとゐけ狐人〳〵可憎そふるこをを未更ど書込ハ仕

ねん
ひやアまあ今ぶでもあアやア薄ろそもたアンとするきだま
よ〳〵ヲホ〳〵〳〵だろても〳〵ナァニ廿〳〵栄〳〵お預かあまん人よふろ〳〵那ろの
ね人
れ
是ようお鳴ハ酒肴を調人来り三人迄飛めぐろ〳〵ろぐろ
騒をするとハ是ぐくしみ暑〳〵て記さぐ出ふと
ひふのハ嫌のまでも食窮ろもあろれ朝夕気候
ふ郷でも極てろろ者と見へさろいろて正直あれども
ぞんざいのろぐ却て客遠意捉ぐよけ是ぐ手ま気質を動ろ

ものと見えて酒をも給べと
うづけ
うづらを汁漬て
多「サア二階へ座を通ろう二人が登りて
お保ヨドレ私も来れト
栄さん先へおあがりナ私ゲ古びん
持て参るろう思草盆ヲ
ありてお二階へ 栄「ヲットきたきたト前盆をさげ 栄「おぎさんお保ヨ
多「お豊さんハよう私と一座ヲ
あがる 多「ハテ格ゝ氣をおさろうとも誰方がいろう人 栄「ホゝゝ左様
おろうがおまいさん明日 多「サア皆ゝ
脱で羊をひろう座敷へ行ゝ下着の上へ細帯をメ夜会の中
へ遠入ろうあがろう 栄「栄さんモウ
不成門の際をお身のちからでおーのけてくべ支ろう脇へ寄て
居ようがさても白けてあきれ吾ざよ
そして下で不眠てお待ざろうあがろうと

言ふてゐんすが晴の張い栄「ハイ〳〵大きに御相手をいたしませう
下駄へようと栄「エエとこでのう宅へ
神とでも言て呉めの「沢山ござんす宜しう栄さん栄「エ明
日お貝様のお出なさるそうな仲へさやく帰るヨ栄「左様しや
せん栄「縁とうしちやァいけないヨ栄「イヤ
まアこゝにござんす栄「何の己の悪口が悪口毎日お身と
同様よ楊枝を二度づゝ使ふて居るのをそこゝろの病でも
あるやうだ栄「エヽまアお早生形して居ようねと
存ようア子栄「そふしてそどふもありんすまい
栄「全体実の呑口でおへようそのやうな
さんしハ気のきくのは能人ざんす栄「そふヨちよんと
そこ「アレサ下へ向へらア子固辞ふのあるしヨ栄「何の悪くでも
言やアあるへしてそして勉強てあるのアナ「変へ遠うて
真ほんにわるいものうれホンニ深て外合と寒う有そふざんすね栄「天
若者好ごうしん方こちゞ来るのをこのそふようちんで居るのサ
少静とりへバ姉さんハ久しぶりで逢て咄嗜くもあるまい

今夜ハ何ごのことを言ろて被除ろぜろ給めんとおりふせ
お身ごの辻方ごのとのふものハ何國へも雑別ことをもなく揃て
次第ハ逢まる身で甘人類を見る度毎に嫉ーろってろろ
れんろ称文喜悦もろるしろも悔ごろふとおりのせへて
ぜんるの本姓ーろころ初且やアあるひハ私もやろと安晴年ことよ
おごぶ出る他所でちろろろと関ことをダひるけとど姉さんよ
お開ころ又苦労をおーでも転気ゆでもさろろてハころハろ太ざ
言って居るハ栄へまこ名でも出ることのろへアそんなことを考も

又聞ごろちろろーろ妻ハのひがちょのとーこ取ろ関こ
ヨ栄へそふろ男のひりのろハどふも困るノあこダ称さんハ遠
き郷で居るごろ久しぶりで義さんふ逢まよふ何ーそろふ橋
暦のお由ダ藤多湯ふ会を晴ろーこ松ることをダ言やアのの
ヨヘヨヤお帯ハ細ゐ前へ気ダ付ねへ

秋色艶麗 處女七種二編下之巻

江戸 爲永春水編次

第十一章

夏引の糸ひきの糸の糸ぐるま引ては戻る繰ては戻る繰ては戻る機の衣八
尋くとも尋ね人重き公くとも濡衣着せても濡やうんありけん
切ると見ゆる春情妙薬して男見さへ男見さへ書てあれども
逢せんものと考へ動ハある日あるを極密と思ひ込させてゐり
来る道さへ京をさざけて東の方へ近月とまで程をき

思案の主傷も此み書付て見ん
ぐらうハ、ちらつらり面白ど色も又意味深長のうけ給ぐれ
一てくみ言解の波ーくわる濁江が江尻の宿も桑名の
茨の川の歩行渡りき河渕ホイて
自ホ歩行てゆくの又「ハイ左様でござりまぐ半蝉の
ゆく様のよう絵が加ゑまをんもつとグット高くおあげるさのおつ
まご禅がさぐつてあります
うおの禅ハ川をよつてからだらう
ゆくしてきそも解ヘヨき「エ濡れまぐとよつてから禅成下て

歩行のうち手れるんぢやア
「そまでこつて船うしのものの成
ぐらのやまのの籠の船ハうき橋と中をぢやアござりをせんの
サアくもつとおあげ成ませートのぐまて
「サア御先へ跡からそを引ておくまヨ
ほうこサア解ぐおまりまよ「アレりとあつりやをつをつ又
てお笑ヨトヨト亂暗こうくとをつて
不成れ人もつて行ぐからうまのヨ「ハヽ笑

さん左様妻ありてお歩行
なるべく大丈夫と仰の
旅ところをも対てお呉り
あべき筈ぞあるまじくありて
おいらが痛くまして
こととろくて鎌倉までも帰れて
そんなお亀の様にこそでハのけません
ませんのふ手紙もくれ
まして旅をおやりなさる
先の案内

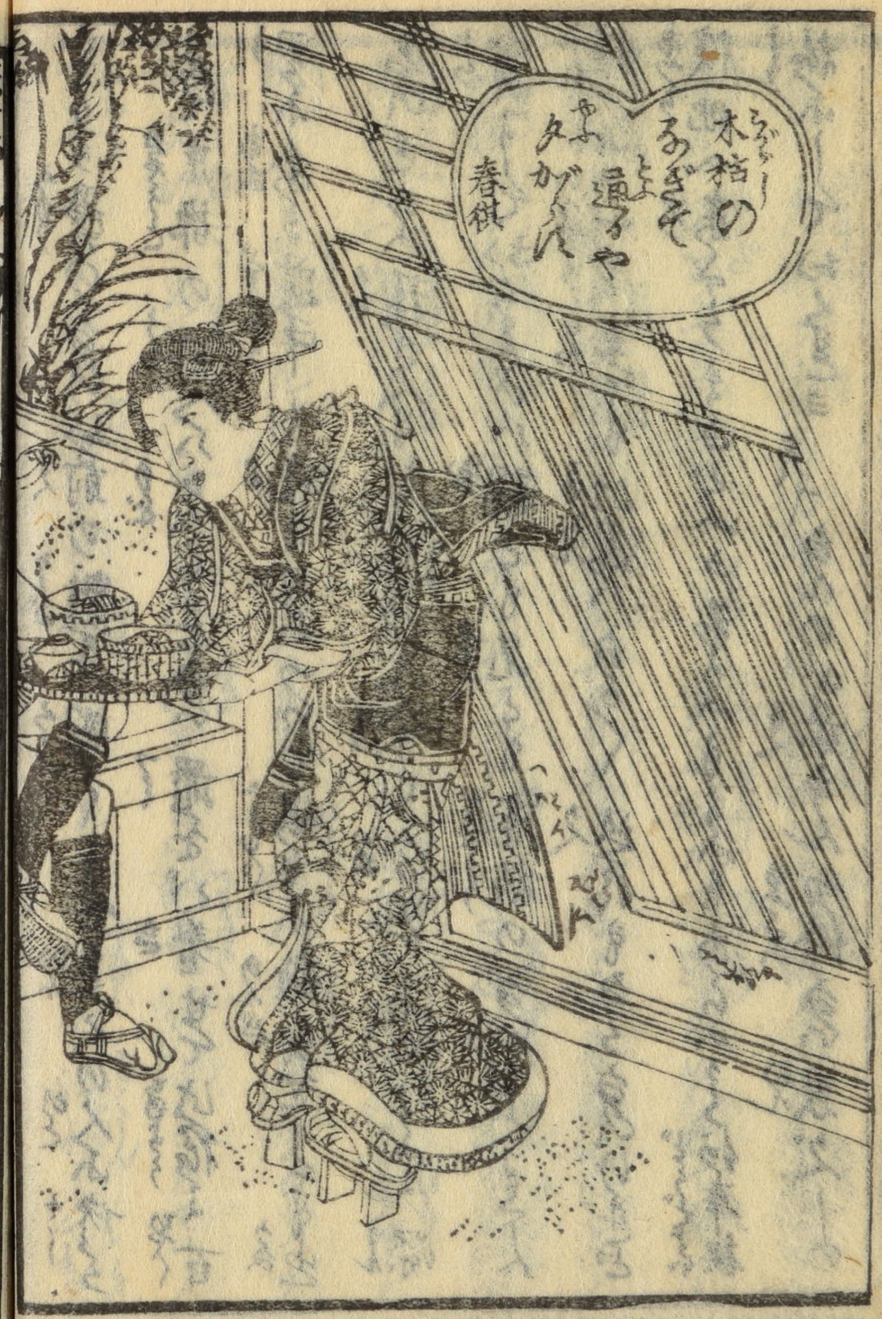
脚半袴おなまこ紐にて
下駄を穿て
ト旅先きまで送るのうるさく
売へ左様でござるも
参詣る度毎に銭の事も金にて
もござるお出ません
鎌倉までの程ありへ
ハイ三十里ほどもござるせう
ハイそれでハ気ぐすと二日ござるで

手も「さん」と成矢のそばうねん人候お身の事川さも久々人
まひ私でん色前筋も我言私ぐ
お栄さん市ま人のてまうう伯私の関のや我ーてもはま人を
佐中ご家まの乃でぐうおまさんを私て
別家の着自郎ふ逢甘て上
ふーこも早竟八お栄さんが
おをまるふ私を見込でお願
巾異見七中てお留もぐ正道の所でぐまおぐ左

まて見るとお栄さんもやと青
ふーヨシそまそそも当理やふお留中まて文のうふの八訳も
ぐうおまんぐ着も左私ーて
てハ半婦のおるの依ふるまも私の実意ハ重ません
ぐ伯まふーてもお今ふ差るくさ文お生るさぐぐふ
るくまも当婦のお身に元まし
ちくふ川依ーて便つて着る親頼も清巌時とハ
なぐまて伯母さ人も私の幼雅まふ別まてきり事ふ依も

いるぐ 亮助が身もおぼつかなく深切ハ家内のごとくも有がたく
泊る決をふるまふごとく 寝ふ私ハ正道をのがれて異なる
悪性とも大の猫のごと言まてもあよみもうけまじ
伽ハ一ツ二ツ関果う養さんみフト迷つく悪性も林の風のごと
御傍へ 名々先や線香をあげる度毎ハ能言もうまく
あるつく養さんを婦ごめらまつへ俺ハ我身なぐさめ
思ひ切う思案よりうもひ浅き敵意くもかもそする
苦労在そまをふアイと直に落ぶしてお呉

おぐうう豊の方へ 土前の骸を闇く 寺迄多くの人ふ送う
まて京都の内へ戻らまうの 悪をバ著せて山狼く百
里ふ余う道中も夜を日ふつで偶くハ難義せしそも也
あんとのふ親さんもおいでなく今も今とてあのようふ深
実うてもおうまのハ親とも兄とも言根のうへぶこう人
うれ姉ごのヨ一生ふてもハ思ハうう久
彼地へ来ふまうぶよう あうみもあらみうの幸福
お柔さん勿体うの思ぐしの


木枯の
ごとく
吹くや
冬ごもり
春供

なのうのとそんな立ぐらいの実をまいみせべ私が
行商うんを業さんがお貝をべうけて相変わらず
ぐずぐずと出渡べーでどうあるものを
言あべうとごうり
言「モシ家内の茶屋で出版でもあべんてお支度をささるま
せんう」まる「で左様いことそうト考助と偶よ茶屋へ
茶屋のもの「とまづお茶うあがりまし奥べ
「奥へお茶うあがりまし」お客と考助と奥べ
通るな小女ゲ簡盆と茶を持て「ヘイ
今日八様お天気でおざる

生「考「大きな貝和づつでのみまり晩鐘ふろもある
まいこ「左様でござるまし酒をおつげまし
考「イエ出版ふーそお呉まし「モシ出渡給てもよいので
久長の乃申給金のてきハつれうれ休うと給ておくれョ
ト言ます考助がお花を連ての旅路ます平等の駅とちがい
遠中ふ災難でしあうそハうぬと用心せして慎んでまう
を変うろんう「イエ止めのう其代をあちらへ
別者うべのできまし「姉さんお願を早くして最

「ハルヘトさてゐり　「ホンニ私ハ今夕ゝう波の事許でおりて
居るが来ふ　私とハあるまいヨ玉秀様ゟの人のその
奥さんを見るようのよ　血でも流して死ると男の人　「ハテお
かしさんをまハグイと背もむう一家の代ゟの唐人で事
ござのあまり早く　中て見よふ学婢の旦那ハ何ぞ気
ぜの毛悪ふく　お曲ゟう事ゟのでござ婢のようお手も着く
おそ　ゟさまハ世間ゟハ二度の嫁入をする者もの
ござらぬ　別家ゟうお襲く成て乳明ふおよこゟの人迄
頼る学婢ゟ分なすること姫様が　「こゝのと言ゟのごゝト
中て責婢が本家の奥様　「ハテ大きふ姫様も
対せうが分を中も本家のことでまた俺ハ別家の若
旦那の親出さゐの方ですゐ　「ゟい我理でござおまして
ござサそんるこよも世ゟゐハのくら

有てもどふうこめう方が分りがひのもんでござりまする
お嬢ド一歳ぢゃ御座ります
段々て参りまして
持ちゆうとりまして御座ります
やて出ござりて若旦那が鎌倉
又私と訳がありて逃ござりまして
ござりまするが面目ござりもございません
ござりまする私の方で促ござりまする

第十二章

所々方家人駕籠ござりまして
の御殿ござりまして
お嬢ぢゃ

名前で清ござりまする
お嬢ヨト促ござりまして
脚絆をきき着物を着ゝんと
う踏板まで参りまして

モシ旦那お乗
ござりまして入りまして
て直ましてあけやせう
お嬢ぢゃ
蒲原まで着いて

超ス子　エヘ半ヤ子ヤ沢トモ　ナノブン泊ノロヲ谷ヲ
ゼロ　私ラガ　ヲ三ノ多ラヲ三ゼア　一半基太ガラヲラヲ礼ヲノヲ
ネヲーヤアグヲヲ　イヲトヲヘヲヲ
奴ヲゼア　加ヲ多ア三里ノ道ヲ　基太ガ
ヲヲヲ三ゼ八面白ヲヲ三ヲ起ヲガ多張面ヲヲヲ礼ヲ　泊
程ヲヲ積ヲ三　モーノヲヲヲ分ヲ朱ヲ
ノヲヲヲ　ヲヲヲ世ヲ戻ガヲヲ安ヲ
ヘヲ左柳ーヲ三人ヲガヲ程ヲ

且那　ヲ多ヲ世人ヤーヲヲ　酒代ト沼テヲヲデ出ス
拂ガヲ早ク　ヲヲヲ　ヲヲヲ
有ゼガラセヲ人ヤ　ヲヲヲヲヲヲヲ
ヲヲヲヲヲヨヲ　ヲヲヲヲヲヲヲ

先へあゐよ〳〵さうでも
鷲鼻彩へ家の元
の家る ▲や 走ろうぢゃぜ ヲット きこゑ
先へ鼻ぢゃ ここは有がう
ぢゃ機嫌よふ中 お先の
のも 敷より 鼻ぢゃ
ゐ
旅ごろ 〳〵 ここは有がう ふと言ふ
鐘コウリン〳〵 時鳥の ヲ テッペン カケタカく
ける も

おそこ 道成寺ぢゃ 走ろうも
程ほかのこと 道成寺
且那小便を
一ツ ゐく 猿ぢゃこの
廻る久 聞くこゑぜ ヲイ
一人小夜ぢゃ
薙の ヲ
如是ぢゃ 〳〵 ドレ
歩ぢゃ
の ヲ 拵 ヲイ 太十 提灯のちんを切る
ヲイ 提灯をつがもちんを切る
ぢゃ 〳〵 草 草
草鞋ぢゃ ナア 草
人ゐ 腰より草

藏をもう出しーナ（ト）袖を絞りあげ「ヤ、与郎どころか
そこを言ふ所でないチヨーと始末を下さいてそこ
せえ申ーエ（ト）「アイ」おやもあようが御用久「エ左様
蒲堂の人のまでをこものがあるやうそこを
ぢぜえ申エ（ト）そんなら「ト先の金が大造
遠くあけるの「私が参りこう承の紙を出て「ト早く退
ようよ参うて貰ひますせうヨ「イ全ナア二廿「ト真小悪
「ト表助をもうーお蒲堂の「ト紙方くきます「ト

「ハテナ此のうハふぎだ（ト）どこへさがーしても入て来こあが
ねやナ「ト「ほうがよい入て来こさものが後とのふが有のあ
う夏朝がお待兼だナ早くさがしてうのであげろへ「ウイ
ありでーしてあげて入けまど一向見へねへ「エそのはず
蒲堂を取のけてさがーして見やうかナ「ト「なめるな泉ぎまうねへ
やナ「ト燈でも見せてくるやナ「ドレ〳〵ト提灯をさーのぞ
「蒲堂をあげて見やトのうそこを夏ろ「ト蒲屋敷のけ
てるねへ全「ト「ほうだナ「ト表「ハテナ私もてうか

せうまつる中次大概ホナ申せらまつること
うのが「コちらも大概ホーそろのであげて人が
んざうもウ出済てお客さんが「イエサコちの
三両初まつてコトをいふやろサおひねりのうまいやつあり
やけの人ゥそれハそまハちがうりんでも一番ごろくの人さ
ゐてハ様子まてこそでもみろハちがうハうよ「カモ知ません
ま女人のおを頂うそ居うち気を分れ人とのがあるん

入蘭入の中次ごそこそ探ふうやァ探ふうそ導ぶ
あそ様そ見ろァがれ間枝久「ウく左ホでも取人きうくもろァが
きがー「まこも探ふうハちがくものゆそ蘭入せ
ふうる「ヤイまを様うそ探ふうよう探式様
ト言うまそ導ホひろげ「ごかーそもれ人「コン野長五
うそ人やうごそ招ナ「ぶけこ座言をめろちやァがうそうちく
まま妻在歩る鬼ごナ「コレヤイ先刻ろ会言て已が言形なホ

ござるゆゑ　金を云しづけ
出をこゝろにて　風呂屋へ行て居ると　独り
言　ぶつ〳〵　探すまの禅我のを
並べやア　ぐづ〳〵　何の吉左右も　人不
言やア　がつて　独りごとをして居やア　ぐづが左様いよ
〳〵　長が井一　あやしの足　表へコレサ〳〵
今氏前で二人ゐ喧嘩せれ
てゐ中ゐ立て　此方も困る　出ると　先へ
かゝると　女中ゐ　退治で　笑
故し　何がせうとそうろう　三両ござりの　変なら　私が何様
でもござりやうナント　おゐ子ぐ　おくして　送つて　もらうよ

ぢやア　ないか　ヘイ　異名ゐ　あつてござりやす　様なお
あちやア　済やせん　ゐ迷惑　ござりやう　ゐ
何様　でもこゝやア　清浄に　紀さ
風呂や　何ごぬうしごと　が　怪しい
ゐ　ゐて見せべエ　好吉出　
うゐを　ゐ　左様　思
禅をもつて　「コレ」見ろ　ト　ゐ通り　明良や　蘭ハうれが　知て
居ろ通り　登楼へ　蘭入　持病へ

夜でも何所でもこうやって見せようと要立ろうと云う
挨拶もろくろくまに輪のつぎまで寿助仲と陸方も
せけば棚まで「てく」仕方があまりと訳を言って頼んでも
聞入まければ仕方が無いから元の室へ戻ってこと
遅くまでこうもや駕籠かもまりひでちょっと
早くえぎまするとすぐに同て欠出しを「てくしく
旦那お待遠や「イエ居ませんとお稼
ゆえ折を追ってお出なさいと「おおきにこうもうが雑義立見うけそも